

## 非行少年の生活意識に関する研究(その1)

矯正協会附属中央研究所 大川 力  
 澁上 康幸\*  
 東京矯正管区 門本 泉\*\*

キーワード：非行少年，生活意識，職業観，時間的展望，時間的指向性，未来考慮

### 1 はじめに

平成10年版の犯罪白書は、「少年非行の動向と非行少年の処遇」を副題としているが、その中で「非行少年の生活意識と価値観」という章を設け、少年鑑別所所在少年、少年院在院者、保護観察対象者の約6,600人を対象として行った調査の結果を報告している。また、その中で平成2年に行った同様の調査（少年鑑別所所在者のみ）との比較も行っているが、その結果を次のようにまとめている。

まず、少年鑑別所所在者についての2回の調査の経年比較の結果を、次のようにまとめている。

- ① 男女とも否定的な自己意識はやや軽減されてきたが、現実の自分の在り方に対する満足度は低下している。
- ② 家族についての受け止め方が好転し、非行少年を取り巻く身近な人間関係における家族の持つ意味が大きくなっている。
- ③ 身近な人間関係の中で、友人等が依然として大きな意味を持っていることは変わらないが、交友関係における情緒的親密感が薄まっている。
- ④ 気軽さを好み、あえて自己主張せず、努力よりも目先の楽しみを追求傾向は薄らい

できており、伝統的価値観に対する賛成率も下がっている。

また、少年鑑別所所在者、少年院在院者、保護観察対象者間の比較から、非行性の進んでいる者の特徴を次のようにまとめている。

- ① 家庭、交友、今の自分の生き方について満足とする者の比率が低く、自分に対する否定的意識が強い。
  - ② 家族との交流が希薄になり、自分の親の養育態度に問題を感じる者の比率が高くなっている。
  - ③ 同世代の者についての見方が、非行性の進んでいない者との間で異なり、同世代の少年に対して、付和雷同的で群れたがる傾向、せつな的で情緒的に不安定な傾向等をかなり強く感じている。
  - ④ 非行の抑止要因として家族を挙げる者は、非行性の進んでいない者と同様比率は高いが、その他の抑止要因として、家族以外に身近な人物や自分自身を挙げる比率は低い。
- この調査は、約7年の間隔を置いて行ったものであるが、非行少年の意識や価値観は比較的短期間でも変わってくることを示している。
- こうした生活意識や価値観は、非行に走る要因として大きな意味を持っているし、非行に走った少年の処遇の決定や、実際の処遇を

\*現新潟少年鑑別所

\*\*現東京少年鑑別所

行う際に重要な資料となることは言うまでもない。一方、生活意識や価値観は、それまでの生育環境や、人格形成に影響を及ぼした親や教師の態度や価値観の影響も考えられるが、本人自身が将来についてどのように考えているかも重要である。そこで、現代の非行少年に見られる生活意識や価値観と未来指向との関連や、それが非行性の進展とどのように関わっているかを見ようとしてこの研究は計画されたものである。

このような未来指向については、心理学では時間的展望 (time perspective) として、またその中でも、時間的指向性 (time orientation) として研究されている。時間的指向性は、「未来指向と現在指向」「展望主義とせつ那主義」などさまざまに言われている。そして、これまで一般的には現在指向やせつ那的な傾向を好ましくないものとし、未来への指向を好ましいものとして評価することが多かった。しかし、白井 (1997) は「青年の現在指向を単にせつ那主義と同一視するのではなく、肯定面を発見しなければならない」とし、「現在指向がせつ那主義と同じで低い動機づけしか持たないとは言えない」として、現在指向にも積極的な面があり得ることを強調している。このように、現在指向と未来指向とを、これまでとは違った面から見直そうとする気運がある。

そこで、本研究においては、非行少年の時間的指向性の特徴を、実際の生活について持っている意識や非行性との関連から検討しようと考えた。とかく非行少年は「現在の状況にばかり目が向き、先のことを考えない」とか、「先の見通しもなく場当たりに行動する」などとされることが多いが、本研究では、それを生活意識や非行性との関連で捉えようとするものである。

## 2 方法

### (1) 対象者

全国の少年鑑別所に、平成10年10月20日から約2か月間観護措置決定により入所した少年のうち、鑑別判定を行った少年を対象とした。

### (2) 調査内容

調査は、次の2種類である。

#### 職員用調査票

調査対象者の次の27項目について、鑑別担当職員に記入を依頼した。各項目とも、少年鑑別所で用いられている鑑別統計カードとほぼ同様の下位項目を設定した。

調査項目 (下線の項目は重複回答可能)

1 年齢	2 性別
3 入所回数	4 知能偏差値
5 法務省式人格目録新追加尺度粗点	
6 非行名	7 非行の動機
8 非行の計画性	9 本件共犯数
10 本件共犯役割	11 不良集団所属
12 <u>在宅保護歴</u>	13 <u>施設歴・処分歴</u>
14 非行初発年齢	15 し癖
16 学歴	17 現職
18 就業期間	19 就業状態
20 転職回数	21 養育者
22 養育安定度	22 現在の保護者
24 保護者の職業	25 兄弟姉妹の数
26 家族の問題	27 鑑別判定

#### 少年用調査票

全部で13種類の質問で構成され、集団又は個別で記入させた。質問は、年齢・性別・入所前の職業のほか、次の10種類の質問で構成されているが、その内容は、次のとおりである。

#### A 職業意識に関する項目

##### A-1 勤労観

「人はどうして働くのだと思いますか」と

いう質問に対し、次の3項目の中から1つを選ばせる。

- ア お金が欲しいから
- イ 社会人として当然することだから
- ウ 仕事を通じて自分を生かすため

#### A-2 転職についての考え方

次の5つの項目から、自分の考えに近いものを1つ選択させる。

- ①つらくても転職せず、一生一つの職場で働き続けるべきである。
- ②職場に強い不満があれば、転職しても仕方がない。
- ③職場に不満があれば、転職する方がよい。
- ④自分の才能を生かすためには、積極的に転職する方がよい。
- ⑤その他

#### A-3 働きたい職場

次の8項目の中から自分が一番働きたい職場を1つ選ばせる。

- ①収入が多い職場
- ②自分の才能が生かせる職場
- ③休みがきちんととれたり、働く時間がきちんと決まっている職場
- ④気持ちの良い人が多い職場
- ⑤かっこいい職場
- ⑥世の中のためになる仕事をしている職場
- ⑦仕事が楽な職場
- ⑧将来の不安のない職場

#### A-4 将来の目標

次の7項目の中から自分の将来の希望を1つ選ばせる。

- ①目立たなくても、社会のために役立つ仕事をしたい。
- ②プロのスポーツ選手や芸能人などの有名人になりたい。
- ③大きな権限や重い責任のある高い地位の職業につきたい。
- ④お金や財産をできるだけ多く蓄えたい。
- ⑤自分の才能や能力を生かした仕事をした

⑥身近な人との愛情を大切にしたい。

⑦その日その日を楽しく生きたい。

以上は、一般群と比較するため、総務庁青少年対策本部(1995)によった。

#### B 生活観・価値観に関する項目

日常生活について持っている意見に対する賛成か反対かを問うもので、「義理人情を大切にすべきだ」など15項目からなっている。これは、茅場ら(1990)の表現を一部変更して用いた。

#### C 未来考慮尺度

淵上・出口(1995)によるもので、「普段から、今やろうとしていることが将来の自分のためになるかどうかを、よく考えながら生活している」など、現在の行動を決定する際に、将来のことをどれくらい考慮するか、ということに関する内容で構成される。この尺度は14項目で構成されていたが、予備調査によって回答に偏りが認められ、弁別力が乏しいと判断された2項目を除外し、本研究では12問を採用した。回答は、「そのとおり」「まあそのとおり」「どちらともいえない」「ややちがう」「ちがう」の5つの回答の中から選ぶ5件法になっており、得点が高いほど、未来を考慮する度合いが強いことを示している。なお、本尺度はStrathman(1994)を参考として作成されたものである。

#### D 時間的信念尺度

白井(1993)によるもので、「どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない」などの時間的展望に対する個人的価値体系に関する内容の12の質問で構成され、回答は、「賛成」「やや賛成」「どちらともいえない」「やや反対」から「反対」までの5つの回答から1つを選ばせる。この尺度は、「将来無関心」「満足遅延」「現在重視」の3つの下位尺度に分けられる。

#### E その他

E-1 「あなたにとって、一番大切な時はいつですか」という質問に対し、過去・現在・

未来の中から選ばせ、その理由を自由記述させる。

E-2 「あなたが一番楽しい時間は何をしているときですか」という質問に対して自由記述で書かせる。

### 3 結果

#### (1) 未来考慮尺度

今回の報告においては、非行少年が未来についてどのように考えているかを主要な軸として分析を行いたいと考えたため、Cの未来考慮尺度を中心として分析を行うこととした。

この尺度は、12の質問で構成されているが、主因子法斜交回転による因子分析を行った結果、2つの因子が得られた。しかし、2つの因子の違いは、逆転項目かそうでないかによるものであるので、単一の尺度として用いることとした（因子行列は表1参照）。得点は、未来を考慮する方から、5、4、3、2、1とし、その合計を未来考慮得点とした。

#### (2) 未来考慮尺度と時間的信念尺度との関連

まず未来考慮尺度と白井(1993)の時間的信念尺度との関連について検討した。時間的信念尺度の下位尺度と、未来考慮尺度との相関係数(Pearsonの相関係数  $r$ ) は次のとおりであった。

「将来無関心」  $r = -.647$

「満足遅延」  $r = .434$

「現在重視」  $r = .060$

このように時間的信念尺度の中の未来考慮に関連する尺度については、未来考慮尺度と比較的高い相関が得られた。

#### (3) 未来考慮尺度と性、年齢

未来考慮尺度得点の平均値を男女別、年齢別に比較したものを表2に示した。性×年齢の2要因分散分析の結果、女子より男子の方が未来考慮得点が高く ( $F=11.62, p<.001$ )、また、年齢が高いほど未来考慮得点が高かった ( $F=3.74, p<.01$ )。

#### (4) 未来考慮と職業意識

ア 勤労観

表1 未来考慮尺度の因子分析結果（主因子法斜交エカマックス回転）

	第1因子	第2因子
⑨ 先のことはそのときになって考えればいいので、今を大切にしたいと思っている	0.784	-0.101
⑧ 先のことも、今を大切に生きていく	0.617	-0.104
⑩ 先のことはよく分からないので、考えてもしかたないと思う	0.583	-0.109
① もし問題が起こってもそのうち何とかかなると思っているので、先のことは気にしない	0.493	0.118
② あまり努力しなくても、将来何とかやっていけると思う	0.456	0.179
④ 素晴らしいものに飛びつくのも早い、飽きるのも早い	0.274	0.140
⑩ 先々良い結果を生まないだろうと分かっている、その時々都合で行動しやすい	0.244	0.226
6 普段から、今やろうとしていることが将来の自分のためになるかどうかを、よく考えながら生活している	-0.121	0.776
3 結果が出るまで何年もかかることのために、日ごろから特別な努力を続けている	0.017	0.538
7 将来成功するためなら、今の喜びや幸福を我慢する	0.114	0.448
5 先の計画を立てることが好きである	0.060	0.424
9 将来のことを、あれこれ空想するのが好きである	0.160	0.229

注 問題番号が○で囲んでるのは逆転項目である。

表2 未来考慮尺度の性別・年齢別得点

年齢	計			男 子			女 子		
	人員	平均	SD	人員	平均	SD	人員	平均	SD
14歳	119	37.25	8.53	94	38.13	8.31	25	33.92	8.69
15歳	220	38.61	7.34	179	38.67	7.22	41	38.36	7.96
16歳	405	39.56	7.12	357	39.94	6.91	48	36.73	7.99
17歳	399	39.58	7.65	365	39.73	7.78	34	37.97	5.89
18歳	351	40.55	7.64	334	40.58	7.59	17	40.00	8.76
19歳	331	41.41	7.60	303	41.62	7.58	28	39.21	7.62
計	1,825	39.83	7.62	1,632	40.09	7.55	193	37.58	7.86

注 SDは標準偏差である。

(4) 未来考慮と職業意識

ア 勤労観

総務庁青少年対策本部では、1970年から5年おきに、青少年の勤労観の変化を分析しているが、それによれば、「仕事を通じて自分の理想を実現したい」には時代的变化がなく、「仕事は義務だから」が減少し、「収入を得るため」が増加しているという(総務庁, 1995)。

今回の調査結果を表3に示したが、「収入を得るため」は女子が高く、男子の方は「自分の理想を実現したい」が高くなっており、男女間で有意な差がみられた ( $\chi^2 = 7.77, p < .05$ )。これは総務庁の最近の調査結果とは逆の傾向を示している。

次に、この勤労観についての回答別に、未来考慮得点を示したのが表4である(以下、分散分析の結果は表4にまとめて記載した)。分散分析の結果によると、男女とも群間に有意差が認められ、収入目的を選んだ群は、他の群に比べ未来考慮得点が低かった。

イ 転職観

次に、転職に対する考え方についての調査結果を表5に示した。参考として総務庁の調査による一般群の回答率を掲げたが、男女とも転職をやや肯定する回答が最も多く、一般群と同じような傾向を示している。

分散分析の結果、男子について群間に有意差が認められた ( $F = 18.79, p < .001$ )。多重比較(LSD法)によると、転職否定群が最も未来考慮得点が高く、次いで、やや否定、肯定、やや肯定の順となっていた。つまり、男子は未来を考慮する者ほど転職には否定的である。

ウ 働きたい職場

働きたい職場について、8つの選択肢から1つを選ばせたが、その結果は表6のとおりである。男女とも「自分の才能が生かせる職場」が1位となっているが、「時間が決まっている職場」や「将来の不安がない職場」では、男女間で差がある。総務庁の調査結果を参考として掲げたが、これは注記のように3つを選択させたものであるからそのままでは比較できないが、選択の順位から見ると、男

表3 勤労観

	今回調査		総務庁調査*	
	男子	女子	男子	女子
お金が欲しいから	38.1	47.2	37.1	27.6
社会人として当然だから	22.8	23.1	27.8	34.0
仕事を通じて自分を生かすため	39.2	29.7	32.6	36.7
人 員	1,632	193	399	420

\*総務庁(1995)によるもので、15歳から19歳の一般青少年を対象に平成2年に行った調査の結果である。

表4 未来考慮得点と職業意識

	男子少年				女子少年					
	平均値	SD	N	F値, p値	多重比較	平均値	SD	N	F値, p値	多重比較
入所前職										
①定職	41.23	7.53	639		>③, ④	38.31	6.12	13		
②パートタイマー	40.40	7.26	181	F=10.21	>④	37.40	7.29	35	F=.098	n. s
③通学	39.31	7.57	385		<①	37.29	8.49	68		
④無職	38.84	7.44	409	p<.001	<①, ②	27.60	8.02	75	p=.961	
勤務観										
①お金が欲しい	37.29	7.81	620		<②, ③	35.09	8.22	90		<②, ③
②社会人の義務	40.96	6.86	367	F=80.26	>①, <③	41.11	6.18	44	F=10.65	>①
③自分を生かすため	42.32	6.75	639	p<.001	>①, ②	38.84	7.25	58	p<.001	>①
転職観										
①否定	42.10	7.19	383		>②, ③, ④	37.26	8.66	34		
②やや否定	39.62	7.43	614	F=18.79	<①, >③	37.70	7.67	93	F=1.66	
③やや肯定	37.32	7.81	178		<①, ②, ④	33.88	8.94	16		n. s
④肯定	39.81	7.31	379	p<.001	>③, <①	39.13	7.57	38	p=.177	
希望する職場										
①収入が多い	36.57	7.59	158		<②④⑥⑧, >⑦	30.65	8.04	20		<②③④⑤
②才能が生かせる	41.86	7.14	629	F=22.81	>①③④⑥⑦, <⑥	40.56	6.80	61	F=4.491	>①③⑦
③休暇がきちんととれる	37.89	7.38	177		<②⑥⑧, >⑦	36.76	6.94	46		>①, <②
④気持ち良い人が多い	39.13	7.05	348	p<.001	>①⑦, <②⑥⑧	38.38	6.87	40	p<.001	>①
⑤格好いい職場	34.91	8.56	22		<②④⑥⑧, >⑦	39.00	9.42	4		>①
⑥世の中のためになる	43.96	5.65	53		>①②③④⑤⑦ ⑧	35.91	7.96	11		-
⑦仕事が楽	28.58	7.41	12		<①②③④⑤⑥ ⑧	29.50	10.60	2		<②
⑧将来の不安がない	41.12	8.07	229		>①③④⑤⑦, <⑥	36.75	12.65	8		-
自分の将来										
①社会の役に立つ	42.20	6.89	124		>②④⑥⑦	42.00	5.64	13		>②⑥⑦
②有名人になりたい	39.24	7.89	172	F=25.90	<①⑤, >⑦	36.21	8.85	14	F=5.84※	<①
③高い地位の職	41.27	6.90	37		<④, ⑦	-	-	0		
④財産を多く蓄える	37.87	7.39	86	p<.001	<①③⑤⑥, >⑦	38.33	9.29	3	p<.001	
⑤才能能力を生かす	41.49	6.88	600		>②④⑥⑦	40.22	6.60	63		>⑥⑦
⑥身近な人との愛情	40.43	7.30	447		<①⑤, >④⑦	36.59	7.68	71		<①⑤, >⑦
⑦楽しく生きる	34.03	7.84	156		<①②③④⑤⑥	33.12	7.91	25		<①⑤⑥

※年齢を考慮した2要因分散分析の場合のF値

表5 転職観

	今回調査		総務庁調査*	
	男子	女子	男子	女子
つらくても転職せず、一生一つの職場で働きつづけるべきである	24.7	19.0	21.8	14.0
職場に強い不満があれば、転職しても仕方がない	39.6	51.1	40.1	41.6
職場に不満があれば、転職する方がよい	11.3	8.7	14.8	16.9
自分の才能をいかすためには、積極的に転職する方がよい	24.4	21.2	21.2	18.6
人 員	1,632	193	643	661

\*総務庁(1996)によるもので、15歳から21歳の一般青少年を対象に平成7年に行った調査の結果である。

子は一般群と非行群で大きな違いはないが、女子は違いがある。非行群の女子は、職業に対する取り組み方に違いがあると考えられるが、非行群の女子は年齢の低い者が多く、就業経験のない者の比率が高いためとも考えら

れる。

分散分析の結果では、男女とも群間に有意差が認められた(男子F=22.81, p<.001, 女子F=4.49, p<.001)。多重比較(LSD法)によると、男子は、「世の中のため」、「才能が生

表6 働きたい職場

	今回調査		総務庁調査*	
	男子	女子	男子	女子
収入が多い職場	9.7	10.3	52.9 ②	49.3 ③
自分の才能がいかせる職場	38.7	31.8	71.7 ①	61.7 ②
休みがきちんととれたり、働く時間がきちん と決まっている職場	10.9	23.6	28.3 ⑤	38.3 ⑤
気持ちの良い人が多い職場	21.2	21.5	47.9 ③	63.3 ①
かっこいい職場	1.4	2.1	11.3 ⑧	8.6 ⑧
世の中のためになる仕事をしている職場	3.3	5.6	20.6 ⑥	28.1 ⑥
仕事が楽な職場	0.7	1.0	13.5 ⑦	11.0 ⑦
将来の不安がない職場	14.0	4.1	42.6 ④	40.5 ④
	1,632	193	399	420

\*総務庁(1995)によるもので、15歳から19歳の一般青少年を対象に平成2年に行った調査の結果である。ただし、この調査は1人3つの回答を選択させたものであるため、参考として掲げた。また、丸数字は率の高い方からの順位である。

かせる」、「将来の不安がない」は未来考慮尺度の得点が高く、「仕事が楽」、「かっこいい」、「収入が多い」は得点が低かった。一方、女子は、「才能を生かせる」は得点が高く、「収入が多い」は得点が低かった。

エ 自分の将来

自分の将来の生活目標について聞いた結果は、表7のとおりであった。男子は「自分の才能や能力を生かした仕事をしたい」が一番多く、次いで「身近な人との愛情を大切にしたい」であるが、女子はその逆になっている。

分散分析の結果では、男子について群間に有意差が認められ ( $F=25.90, p<.001$ )、多重比較 (LSD法) によると、「楽しく生きたい」、「財産を多く」は未来考慮尺度の得点が低く、「社会のために役立つ」、「才能を生かした

仕事」は得点が高かった。

オ 入所前の仕事

入所前の仕事について表8に示した。男子は40%近くが仕事についていたが、女子はパートが20%近くで、定職に就いていた者は少なく、学生生徒が3分の1強になっている。

分散分析の結果によると、男子は群間で有意差が認められ ( $F=10.21, p<.001$ )、多重比較によると、無職者は未来考慮尺度の得点が最も低く、定職に就いていた者は得点が高かった。女子は統計的には群間に有意な差は認められなかった。

表7 自分の将来

	男子	女子
目立たなくても、社会のために役立つことをしたい	7.7	6.8
プロのスポーツ選手や芸能人などのような有名人になりたい	10.5	7.3
大きな権限や重い責任のある高い地位の職につきたい	2.3	0.0
お金や財産をできるだけ多く貯えたい	5.3	1.6
自分の才能や能力をいかした仕事をしたい	37.1	33.5
身近な人との愛情を大切にしたい	27.5	37.7
その日その日を楽しく生きたい	9.7	13.1
人 員	1,632	193

表8 入所前の仕事

	男子	女子
きまった仕事についていた	39.7	6.7
パートタイム（アルバイト）の仕事をしていた	11.2	19.1
学校へ行っていた	25.3	35.1
仕事をしていなかった。	25.3	39.2
人 員	1,632	193

## 5 考察

未来考慮は非行少年の職業意識と大きな関わりが見られ、「収入を得るために仕事をする」という専ら実利を目的とする群は未来考慮が乏しいことが明らかとなった。また、転職観についても、未来を考慮する者ほど転職には否定的であるが、転職に積極的な意義を見出せる場合は、そうは言えない。

未来考慮の差は、希望する職場にも現れており、「収入が多い職場」を選択した者の方が未来を考慮する度合いが乏しく、「自分の才能が活かせる職場」を選択した者の方が未来を考慮する度合いが強い。

さらに、自分の将来に対する意識についても、「自分の才能や能力を活かした仕事をしたい」「目立たなくとも社会のために役立つことをしたい」という、将来についてはっきりした目的意識を持っている者は、未来を考慮する度合いが強く、「その日その日を楽しく生きたい」とする者は未来を考慮する度合いが乏しい。さらに、男子において「お金や財産をできるだけ多く貯えたい」を選択する者、女子において「身近な人との愛情を大切にしたい」を選択する者は、いずれも未来を考慮する度合いが乏しいという結果となった。

以上のように、いろいろな角度から見た職業意識と未来考慮尺度の得点との関連について検討した結果、両者の間には意味のある関連があることが認められた。すなわち、この未来考慮尺度が、生活意識や価値観を測定する有効な尺度となることを示したものと考えられる。

## 6 おわりに

今回の報告では、未来考慮尺度と職業意識との関連を中心とした分析を行ったが、次の報告においては、未来考慮尺度を再検討するとともに、非行性との関連や時間的指向性について報告する予定である。

### 参考文献

- 渕上康幸・出口保行 1995 CFC尺度を用いた非行少年の行動傾向についての一考察  
 (1) 犯罪心理学研究 33-特 142-143  
 茅場薫・山口悦照・坪内宏介・浜孝明・小坂清文・遊間義一・西田太郎 1991 非行少年の生活・価値観に関する研究 法務総合研究所紀要 34 55-111  
 白井利明 1993 時間的信念尺度の検討に関する研究 大阪教育大学紀要第IV部門 42, 51-57  
 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 劉草書房  
 総務庁青少年対策本部 1995 青少年の意識の変化に関する基礎的研究  
 総務庁青少年対策本部 1996 日本の青少年の生活と意識  
 Strathman, A., Gleicher, F., Boninger, D. S., and Edwards, C. S. 1994 The Consideration of Future Consequence. Weighing Immediate and Distant Outcomes of Behavior. Journal of Personality and Social Psychology 1994 6-4, 742-752